

A—85 近世における食生活の構造変化からみた
食品の消費動向 (第1報)
——魚介類を中心として——

和洋女大家政 ○小林 俊
石川松太郎

1. 本研究は、1)戦乱にみちた中世を克服し、3世紀にわたる平和を招来した近世社会(1576~1868)において、いかなる食品が消費されるようになったかを客観的に実証すること、2)消費されるにあたって、どのような加工・調理技術が工夫され、医学的・衛生的・栄養的配慮が施されたかを明らかにすること、3)こうした工夫・配慮を近世全般を貫く食生活の構造変化と対応させつつその食生活史上の意味を究明すること、4)以上の諸結果にもとずき、明治初年以後、はなばなしく展開する近代食生活のために、近世がいかなる基盤を形成したかについて検討すること、をもってねらいとする。

2. 今回は、まず、近世前期における消費動向を客観的に実証するため、和歌食物本草(1630版以下4種)、料理物語(1643版)、日用食性(1668版以下5種)、本朝食鑑(1697版)、などの基礎資料に採録されている食品を、魚介類を中心に精査した。そして、各食品別に付されている記事内容を分析することにより、これらの食品が消費されるにあたって、どのような加工・調理技術上の工夫がこらされ、医学的・衛生的・栄養的配慮が施されていたのかについて検討を加えた。

3. 以上のような操作をへて得られた結果に種々の統計的処理を加えることにより、近世前期における食生活の構造変化と緻密な関連を示す重要な食品の消費動向を究明しえたので、本大会で発表することとした。